

もうひとつの甲子園

清水希容子

一般財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 研究主幹

スポーツばかりでなく、文化文芸の分野でも、高校生が自分たちの実力を競う舞台が増えている。

全国で、東川（北海道）の写真、盛岡の短歌、四国中央の書道パフォーマンス、弘前のファッションなど、「〇〇甲子園」と名付けた全国大会が数多く開催され、毎年、熱い戦いが繰り広げられている（地図参照）。

「俳句甲子園」は、14回目の全国大会が今年も8月に松山で開催された。俳句文化が根付いている松山ならではの取組みだ。松山は正岡子規の出身地、小学校の夏休みの宿題には俳句が出され、結婚披露宴では参加者から即興の句が披露される。デパートや路面電車内などのいたるところに俳句ポストがあり、投稿者は年齢層15歳以下が一番多いと聞き、俳句教育に熱心な学校の先生方の姿が浮かぶ。

大会翌日の地元新聞には、優勝した開成高校Aチーム（東京都）が喜びを爆発させた写真が一面トップで紹介された。学校対抗の予選リーグ戦・決勝トーナメント戦で2日間戦い、29都道府県76校124チームの頂点が決定する。通常は勝ち負けをはっきりさせない俳句だが、ここは高校生甲子園、赤と白の席に5人が対峙し、順に句合わせを行い、3勝（予選リーグは2勝）した方が勝ちとなる。

決勝戦の兼題は「雲」。相手は、東京下町バンカラな制服姿の男子チームと対比的に、素朴でおそろいのポロシャツ姿の女子チーム・愛知県立幸田高校。事前に準備した選りすぐりの俳句が巨大な短冊に示され、2回読み上げてから4分間の鑑賞ディベートを行う。お互いの創造力と感性が真正面からぶつかりあう。

「財布から10円落ちて冬の雲」（幸田高校）、10円落ちることがそんなにたいへんという相手の質問

に、冬に手袋をしていて、はずすとかじかんで、もやもやが増えて冬の雲、しょぼくれ感です。素直な感性に、千人の観客で埋まるホール全体がうなずく。

「自画像に雲を描き足す我鬼忌かな」（開成高校）、雲を描き足すとはという質問に、我鬼忌は芥川龍之介の命日、自画像を描くが何か足りない、雲を足すところに内面性が感じられる。審査員をうならせるうまさ、高校生らしくないと言われても、最後まで正攻法を貫くすがすがしさ。言葉に集中し、知力、体力、気力を使い果たし、審判員たちが旗をあげる直前の静寂と緊張、勝負がつくと会場はどよめき、悔しさのあまり幸田高校の女の子たちは壇上で涙をみせた。

煌めきを放つ10代がつくり出す感動の高校生甲子園。開催当初は、地元松山でさえ参加校を集めるのに苦労したという。手作りで大会の開催を続け、いまでは松山の人々が一年で最も心待ちとするイベントとなった。運営は、事務局を松山青年会議所からNPO法人へ移し、地元自治体、住民、商店街、地元企業からより幅広くサポートを受けやすい体制にして、地域全体で行われている。

全国からの高校OB・OGも裏方として活躍している。自分たちが経験した感動が忘れられず、現役高校生や顧問先生に良き思い出をとボランティアとして松山に帰ってくる。彼らは各地域で地方大会運営や参加が不慣れな学校へ助言などを行い、大会を底辺から支えている。

俳句甲子園を提唱し俳人で元中学校教師の夏井いつきさんは、「毎年、自分の子供が100人ずつ増えて、成長していくような感じですよ」と優しい目で語る。

高校生たちが集う地域には文化が育ち、未来へとつながっていく。



優勝の瞬間

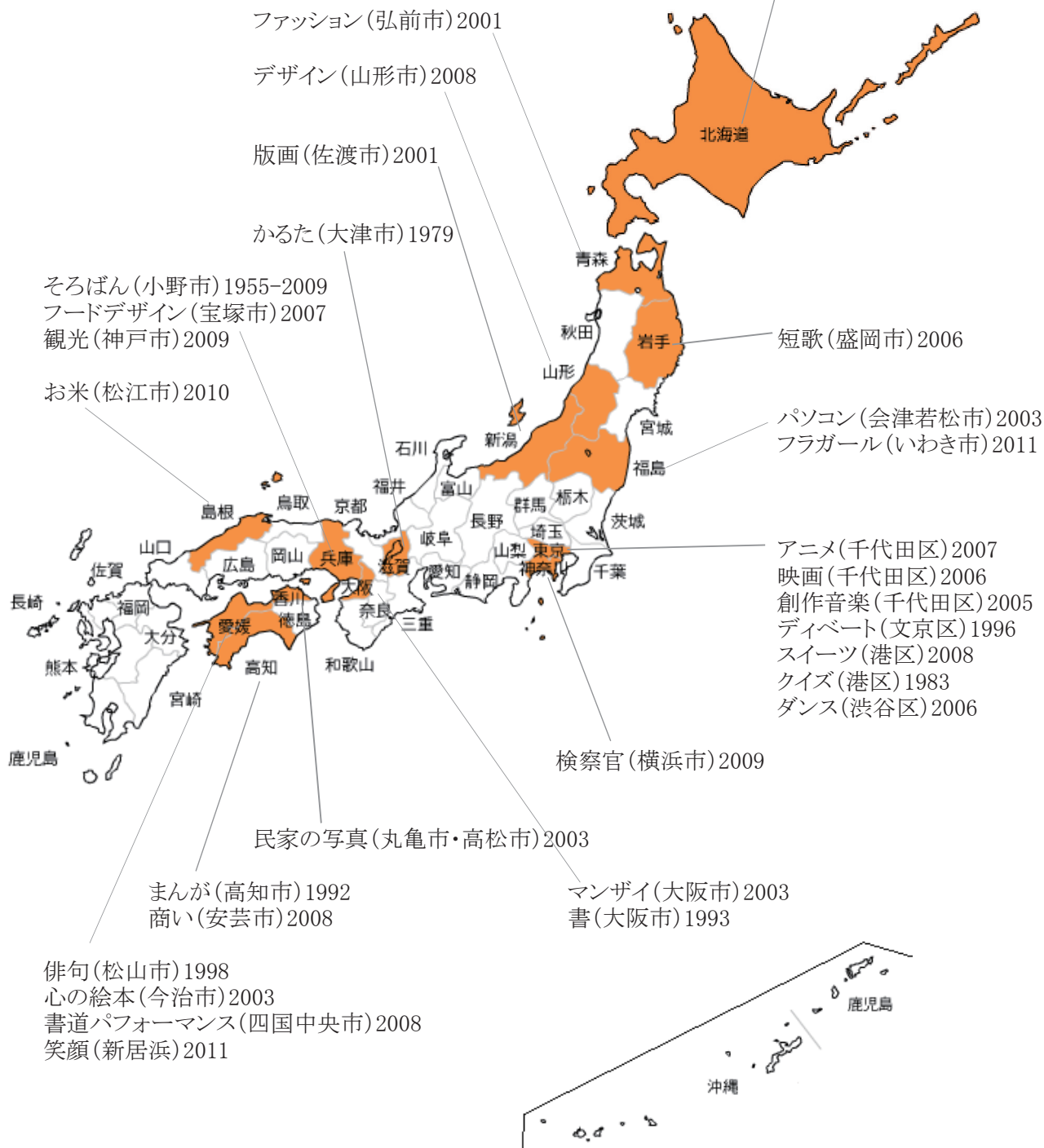
高校生甲子園

数字は第一回開催年



対戦の様子

写真(東川町)1994



* (財)日本経済研究所にて作成

* 当地図は、地域未来研究センター「地域データ図書館」のホームページで拡大してご覧になれます